

## 「英語科教育法 4」の評価

英語教育講座・池野修

### 1. 授業の概要

「英語科教育法 4」は、次のような内容をもつ授業科目である。

英語教員に必要とされる専門知識・技能（基礎）を習得するための講義及び演習を行う。「英語リーディングの指導法」「英語科教育における異文化理解」「英語コミュニケーション活動のバリエーション」「英語の学習意欲」「英語教育評価論」などのテーマを扱い、講義、グループ学習、活動体験&考察を通してこれらのテーマについての理解を深める。また、リサーチ・ペーパーを学期を通して行う課題とする。さらに、注目される英語教育実践についての考察、自主教材作成演習などを行う予定でもある。これらの活動を通して、将来も英語教師として自らを成長させていくことのできる人材を育成する。

この授業の目標は次の 5 つである。

- (1) 扱うテーマ（＝英語リーディングの指導、異文化理解、英語コミュニケーション活動、学習意欲、評価論 etc.）について専門的知識を得ている。
- (2) 英語の指導法・学習法に関してなされる様々な教育的提言や具体的アイデアに触れて、自分自身で授業活動を考案するためのリソースを豊かにすることができている。
- (3) オリジナル英語教材作成及び発表の体験を通して、良い英語教材の条件や教材作成上の留意点などについて理解が深まっている。
- (4) 自らが選択したリサーチ・テーマについて深い知識を習得している。
- (5) 英語教師として自らを成長させていくための方法を理解している。

授業内容は、主に、担当教員が計画したテーマに関する専門的知識を得るという「習得」型の内容（目標(1)(2)に対応、授業形態はグループ学習が主となる）と、オリジナル教材の作成と発表、学期を通したリサーチなどの「探求」型の内容（目標(3)(4)に対応）から構成されている。

### 2. 授業の評価

#### 2.1. 授業評価方法

授業の成果を評価するために、学期末に授業アンケートを実施した。質問内容は、(1) 授業目標の達成度の認識、(2) 扱ったテーマの有用性に関

する評価、(3) 授業で優れていた点（自由記述）、(4) 改善の提案（「あなたが授業担当者であれば、この授業のどの部分をどのように変えるか、なぜか」の 4 点である。この報告書では、(1) (2) (4) について報告する。なお、受講生 27 名全員から回答を得た。

#### 2.2. 授業目標の達成度

本授業の目標の達成度について、「1」（＝全く達成できなかった）～「5」（＝十分に達成できた）の 5 件法尺度で受講生に回答を求めた。調査結果を表 1 に示す。

表 1. 目標の達成度の認識

	1	2	3	4	5
(1) 対象テーマに関する専門的知識	---	---	---	18	9
(2) 英語指導法のアイデア	---	---	4	18	5
(3) オリジナル教材	---	---	1	14	12
(4) 受講生自身によるリサーチ	---	1	2	17	6
(5) 英語教師としての成長	---	---	3	18	6

結果が示すように、「4」を選択している受講生が多く、どの目標もおおよそ達成できたと認識していることが分かる。授業担当者の評価としては、目標 (1) (4) については、多くの受講生が「4」あるいは「5」に到達したが、目標 (2) (3) (5) については、関連の活動に割く時間が極めて限られていたことから、「3」に留まった受講生が多いのではないかと感じている。目標の数を絞る、目標のレベルを調整することなどの検討も含めて、目標と授業内容の整合性を見直し、また授業内容の質の向上を目指したいと考えている。

#### 2.3. 扱ったテーマの有用性

本授業で扱ったテーマの有用性について、「1」（＝全く有用でなかった）～「5」（＝大変有用であった）の 5 件法尺度で受講生に回答を求めた。調査結果を表 2 に示す。

表 2. 扱ったテーマの有用性の認識

	1	2	3	4	5
(A) 英語リーディングの指導	---	---	---	9	18
(B) 英語科教育における異文化理解	---	---	3	13	11
(C) 英語学習意欲	---	---	1	6	20
(D) 英語教育評価論	---	---	2	11	14
(E) 入力・理解→習熟・定着→表現・活用の活動	---	---	---	15	12
(F) 英語教科書の単元の分析	---	---	7	10	10

どのテーマについても、概ねその有用性は認識されていると言える。(F) 英語教科書の単元の分析の評価で「3」を選択した受講生が 7 名と比較的多いのは、このテーマに使った時間が 60 分程度であったことも原因であろう。

「他に／もっと学びたかったテーマ」についても尋ねたところ、次のような回答が得られた。

- ・ 「英語表現」と「コミュニケーション英語」はどのように区別して授業をするのか、それぞれの授業で特徴的な活動内容について
- ・ アクティブ・ラーニング
- ・ ALT とのティーム・ティーチング
- ・ スピーキング・テストの評価方法
- ・ 大学入試センター試験にかわるテスト
- ・ インクルーシブ教育から考える英語指導

時間的制約があり全てのテーマを扱うことは不可能であるが、「教育法 4」の中で優先的に扱うべきテーマについて検討する際に参考としたい。

なお、他にも、「効果的なリスニング教材」や「小学校『外国語科』『外国語活動』の指導法」「小中連携」などの回答も見られたが、これらのテーマは他の授業（＝「英語音声学」「初等教科省察研究（外国語活動）」）で扱っており、興味がある場合はそちらを受講するように学期の最初に伝えている。

#### 2.4. 改善の提案

「あなたが授業担当者であれば、この授業のどの部分をどのように変えるか、なぜか」という質問を通して、授業改善についても受講生に意見を求めた。あまり回答は得られなかったが、気になったものとして次のものがあげられる。

- ・ 英語での活動量を増やす。Study Guide など

の宿題に関しては、すでに自分で考えてきたことなので、負担やプレッシャーはそこまで高くない。

- ・ 「評価」の部分で、自分で実際に問題を作って、その問題が『テストが満たすべき条件』を満たすかフィードバックしてみたい。
- ・ 英語の教材発表について、説明だけだと実感が湧かないので、実際に活動し（活動の模擬授業、時間を 10 分などに定める）、その後自己評価や他者評価ができればよいと思った。
- ・ 最後のリサーチレポートの内容について、他の人がどのような内容を調べているのか、moodle 上などで見てみたい。
- ・ リサーチペーパーの枚数は 4 枚以上ではなく、7 枚以上にする。英語、外国語を担当するものとしてこれからの「量」（質もちろん重要であるが）が書けないと恥ずかしいから。

最初と最後の提案は、自ら（受講生）により厳しい課題を課すことを求めており、これが他の多くの受講生によって共有されるかどうかは分からないが、授業者としては嬉しい回答である。また、「評価」に関する授業では、やはり実際にテスト問題を分析したり、テスト問題を作成したりすることが有用なのは確かであるし、「教材」の発表においても、作った教材について説明するだけではなく、実際にそれを使って活動してみた方が良いことは言うまでもない。これらの回答は、次年度の授業計画において生かしていくつもりである。

#### 3. 地域社会を核とした教育と研究のつながり

本授業は、基本的には、「地域社会を核とした教育と研究のつながり」とは関連性を持たない。強いて言うのであれば、授業の中で、愛媛県の英語教育の現状に関する情報を提供したり、県下での英語授業実践を紹介したりしたことはそれに該当すると考えられる。